

『琉球寫眞景』にみる奄美の民俗文化

—『大鳴古図』・『南島雑話』・『東南アジア大陸北部少数民族の民俗文化との比較から』—

川野 和 昭

一 はじめに

『琉球寫眞景』は、名護市立名護博物館が所蔵する絵巻で、名称が示すように「琉球寫(島)」の「眞(真の)景」を描いた十一景からなるものである。この絵巻が名護博物館に収蔵される経緯については、同館の比嘉武則が詳細な報告を行っているのでそれによってみてみたい。

『琉球寫眞景』は、昭和六二(一九八七)年三月に佐賀県有田町出身で東京在住の関係者及びその勤務先である電通を通じて琉球新報社が購入し、北部本社創立三周年を記念して名護市に寄贈されたものである。寄贈の契機となったのは、名称の「琉球寫(島)」であり、琉球島すなわち沖縄本島という理解がなされ、描かれた「眞(真の)景」の多くが急峻な山がちな風景であったところから、描かれた地域が沖縄本島の北部ヤンバル地域であるとされ、その中心地である名護市に寄贈されたものである。その後、琉球新報社はそうした理解に基づいて、ヤンバル地域の地名を付して各場面を紙面紹介した。寄贈を受けた名護博物館では平成元年に奄美大島の名瀬市、龍郷町、瀬戸内町を調査し、描かれた第一景が名瀬湾であることをはじめとして、他の場面も奄美である感を強く抱き、その存在を名瀬市立奄美博物館に連絡をとっている。その後仮修復を進め、平成二(一九九〇)年二月に特別展『琉球寫眞景』を開催し一般公開を行った。平成四(一九九二)年十一月一日には名護市文化

財として指定された。比嘉の報告は、平成十四(二〇〇二)年三月にこれらの成果としてまとめられたものである。

さらに平成十二年十二月には、その全景が「琉球寫眞景の世界」と題して、南海日日新聞紙上においても弓削正己氏の解説を付して、奄美の人々に広く紹介された。また、平成十四年八月一七日から九月一日にかけて名瀬市立奄美博物館で特別展「琉球寫眞景と奄美大島」が開催され、開催初日に記念講演会・シンポジウムが行われた。さらに、平成十五年四月二二日から七月二二日にかけて鹿児島県歴史資料センター黎明館で企画展「描かれた奄美」が開催され、『南島雑話』、『大鳴古図』及び関連する有形民俗資料とともに、『琉球寫眞景』が展示され大きな反響を呼んだ。

二 これまでの理解と問題の所在

ところで、平成二年の一般公開に際し、いち早く『琉球寫眞景』に描かれた世界が奄美以外ではあり得ないことを、民俗文化の視点から鋭く指摘したのが琉球大学の津波高志である。その時の具体的な指摘は分からないが、名瀬市立奄美博物館でのシンポジウムにパネリストとして参加した津波は、シンポジウムの発言を補う形で南海日日新聞紙上に「琉球寫眞景の文化描写」と題した文章を、九月三〇日から十月一七日にか

け五回にわたって発表している。それは、「出合った当時を思い出しながら」と言っているように、彼が最初に「奄美以外ではあり得ない」と見た『琉球寫眞景』の民俗学的な読み取りとほぼ同じであると思われる。

この中で、津波はその内容の把握の方法として、奄美の地域内に拘って理解することの危うさを指摘し、琉球全体と関わりながら捉える比較の視点の重要性を述べている。その視点に立って、描かれた文化的要素を「奄美から八重山までの全琉球的要素」、「奄美から沖縄本島北部までの北部琉球的要素」、「奄美だけの要素」の三つに分けて読み解くことを試みている。先ず、「全琉球的要素」としては、第六、七、九、十景の人物の頭に挿された簪、第九景の豚とを指摘している。さらに、「北部琉球的要素」としては、第三景の「芭蕉を運ぶ竹籠による額負い運搬と芭蕉の山」をあげ、「奄美だけの要素」としては、第十景の「大和相撲」、第六景の「八月踊り」、第二景と第七景の「高倉の下の空間の利用の仕方」、第七景の「漁師の持つ權」をあげている。さらに、津波は第九景の小耳豚を取りあげ「沖縄や本土以外の地域との比較」の必要性を説いている。津波のこれらの視点と文化要素の取りあげ方とその鋭い洞察は、沖縄の民俗学者の面目躍如たるものがある。津波が説くように、おそらく自己の文化理解とはそうした他者との比較の過程を通して初めて可能になることは間違いない。

さて、「南島雑話との比較」というもう一つ大事な視点を提起しているのが比嘉武則である。比嘉は両者の絵柄の類似点として、「第三景「芭蕉とティルの二人」は南島雑話の『大嶮竊覽』の図、絵巻第五景の「キビ刈り、田仕事」は南島雑話『大嶮漫筆』砂糖製法之事、絵巻第七景「高倉と仕事帰りの人々」は南島雑話『大嶮漫筆』の○庭の外の馬屋、

高蔵を合体したものの。薪を運ぶ人たち「南島雑記」の薪之事」などをあげて、両者の関係の解明の必要性を指摘している。本稿もまたこの比嘉の指摘を受けて、さらに詳細に検討することになる。

この津波と比嘉の指摘は、『琉球寫眞景』をとおして奄美大島の民俗的な文化の位置づけを行うに当たって、極めて的確な卓見として高く評価されてよい。本稿では、これらの研究成果を基にして、比較の領域を東南アジア大陸部北部及び中国南西部の少数民族にまで広げて、『南島雑話』の諸本に鹿児島県立図書館所蔵の『大嶋古図』の地理的情報を加えて、さらなる詳細な検討を加えてみたい。特に、キーワードとして有形民俗資料を用いて、『琉球寫眞景』が描いた地域に迫るとともに、奄美諸島や沖縄諸島の民俗文化の読み解きの可能性について触れてみたい。尚、鹿児島大学の下原美保による絵画史の視点からの研究があるが、ここではそれについてはあえて触れないことをお断りしておきたい。それでは、第一景から順次見ていくことにする。

三 『琉球寫眞景』に描かれた奄美大島の読み解き

第一景

名瀬湾の周縁を描いた図で、山や川、道、小島、岬、砂浜などの地形、集落の屋敷、舟・帆船などが描かれている。兩岸と背後を山に囲まれ、前面に海が開けるといふ奄美大島の集落景観を見事に捉えている。集落内を二本の川が流れている。手前が永田川で、奥が新川であろう。新川は小俣の辺りで後良川と二手に分かれている。この二本の川の姿は、嘉永四（一八五二）年から翌年にかけて、守衛物頭汾陽次郎右衛門らの手によって作成されたされた『大嶋古図』にもはっきりと描かれており、



『琉球眞景』第1景部分拡大 S

それはみごとに一致する。右手端の
 拝み山の前面に集落が広がり、海に
 向かって右手に伊津部、小浜、佐大
 熊、山羊島が、左手に入船、矢之脇
 へと続く砂浜が描かれている。

湾の中央部には二艘の大きな帆船
 が描かれ、鹿児島との間を往き来す
 る船であると思われる。さらに、左
 手上の山羊島の向こうには、大熊港
 に入りする一艘の帆船が見える。

砂浜にはスブネ（刳舟）かイタツケ
 （板付け）かは定かでない（やや長

い方がイタツケで、短い方がスブネの可能性はある）が、小舟が置かれ
 ている。また、手前の岬付近に二人乗り一艘、一人乗り三艘が、対岸の
 小浜の前に一人乗り二艘、佐大熊の前に一人乗り二艘が浮かんでおり、
 漁の最中であると思われる。

また、仲勝、有屋方面から小浜に下る峠越えの急峻な道は、龍郷、笠
 利方面に通ずる「船倉道」と呼ばれる主要道である。これも『大嶋古
 図』に描かれているとおりであり、『琉球眞景』との深い関係を窺わ
 せる図である。

湾の手前に描かれた六区画に分かれて建つ大きな家の一群は、享和
 元（一八〇一）年に伊津部村に置かれた伊津部飯屋で、現在の矢之脇町
 の地に当たる。林蘇喜男は、この飯屋の屋敷の構成について、『鹿児島
 県 名瀬港』（重信印刷所、大正三年）の「飯屋の跡」の記述を引用し

ながら、朝仁へ越える「朝仁あさひびら」から眺めた景観で、西側から順に、



『琉球眞景』第1景部分拡大 S

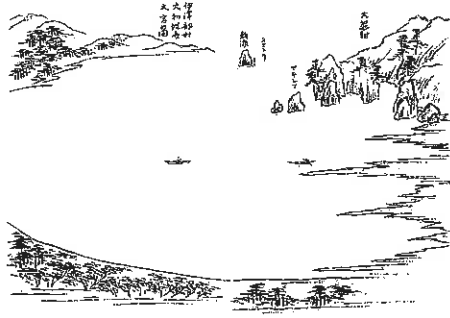
宇検飯屋、實久飯屋、本飯屋、東飯屋、
 名瀬飯屋、笠利飯屋であるとしている。

一方、島民が居住する民家は、多棟式と
 いう奄美の民家の形式を見事に捉えてい
 る。大きい棟がオモチと呼ばれる居住棟
 で、小さい棟がトーグラと呼ばれる炊事
 棟で、二棟はそれぞれ軒先が離れており、
 離れ二つ家と呼び二つの家の間には板や、
 廊下を渡して往き来するようになってい

る。また、右下の集落内に描かれた一際大きな家は、島のユカリツチュ
 である基家の家であろうと思われる。こうした、大きな家は集落を描い
 た別の場面にも共通して描かれている。

さらに、手前左端の山の上と対岸の小浜と佐大熊との間の山の上には、
 一棟ずつ小屋が建てられている。この小屋がどういう性格を持った建物

かは分からないが、手前左端の山の上の
 建物は東京大学史料編纂所蔵『南島雑話
 自一至二』の名瀬湾を描いた図に「伊津
 部村大和城弁天堂の図」とある「弁天
 宮」や、『大嶋古図』に「此山上二弁天
 堂アリ」とある「弁天堂」に比定できる。
 また、対岸の小屋は「待ち網」漁の魚見
 小屋の可能性も考えられる



『南島雑話自一至二』東京大学編纂所蔵

こうしてみると、これらの詳細な描写

は地理や民俗に関する極めて正確な情報を基に書かれていると言える。言われているように、作者の岡本豊彦が大島に来ずに『琉球島眞景』を描いたのであれば、少なくとも『南島雑話』や『大嶋古図』レベルの情報的前提としていたことは疑いようのないことである。

第二景

伊津部村（今の名瀬）の五月五日の「ハレコギ（爬龍舟漕競争）」の様子を描いたものである。漕ぎ手三三人、三四人、三六人とそれぞれに音頭取りが一人ずつ乗った三艘のイタツケが、沖の立神を目指して漕ぎ



『南島雑話自一至二』東京大学編纂所所蔵

競っている。立神の奥には大熊と有良の間を遮る山並みが海に落ち込み、その先に梵論瀬崎が右手には山羊島が描かれており、長浜の上あたりから俯瞰した図であると思われる。これは東京大学史料編纂所所蔵『南島雑話自一至二』や鹿児島大学図書館所蔵『南島雑話五』の「五月五日ハレコキノ図」に「伊津村にてハ此小き離れ嶋廻り本の所へ漕ぎ返るを勝とす 小き離れ嶋の惣名をタコトリト云」とある解説のとおりである。ただ、

漕ぎ手の人数や船の数は異なっている。また、イタツケの形は「大島の



『琉球島眞景』第2景部分拡大 S

ないのも不自然ではある。

イタツケはどっちが前か後か分からない」と言われるのとは異なり、艫とこの形が艫みまとは一致していない。これは、東京大学史料編纂所所蔵『南島雑話自一至二』や鹿児島大学図書館所蔵『南島雑話五』の「五月五日ハレコギの図」に描かれたイタツケの燕尾形の艫の形と一致する。また、音頭取りが舟の艫に立たずに中央部に立っているのも、チヂンを持つてい



『琉球島眞景』第2景部分拡大 S

浜辺には東京大学史料編纂所所蔵『南島雑話自一至二』や鹿児島大学図書館所蔵『南島雑話五』の「五月五日ハレコキノ図」に、「諸人見物 男女群集す」とあるように、大勢の見物人が三グループに分けて描かれている。特に、中央の高倉の中のグループが注目される。琉球塗りの赤い重箱を囲む6人の男たちは鹿児島から赴任した詰役人で、その後側に島の役人と思われる人々が座しており、そこには歴然とした格差が見てとれる。これは、先の「五月五日ハレコキノ図」ではさらに明確に描かれ、両者の間にはある程度の空間が設けられている。また、後者の人々と左手下の浜の人々の中に一人ずつ僧侶と思われる丸坊主の男性が描か



竹の根を内に葺いた屋根 十島村口之島

分かる。これは、東京大学史料編纂所所蔵『大嶋漫筆全』の「茅家葺ノ図」の描写と全く同一である。その解説に拠れば「茅葺モ吾藩ノ茅葺ト異ナリテ根ヲ内ニ葺テ上ヲ挟ミ摘ム事ナク其儼ニシテ見分ハヨカラ子トモ数年ヲ保ツヘシ證拠ニハ長貳尺ニ足ラザル茅ヲ切りテ其日ニ青茅ヲ以テ葺ナレトモ八年計リハ保ツトナリ吾藩ノカタシタラハ三年モ保チカタカラン茅ノ根ヲ内ニ入レテ葺ク訊ナルベシ吾



『大嶋漫筆全』東京大学編纂所所蔵

鹿兒島に帰って出家する意志のない者なのであろうか。いずれにしても、詰役人とは同列扱いされない存在として描かれている。また、高倉の屋根の葺き方を見ると、萱の穂先を下に向けて葺いてあることが

れている。特に、左手下の浜の人々の中にいる男性は、紫の衣を着し右手には白の扇子を持っている。これは流人として大島にきた後に出家したものであろうか。ただ、東京大学史料編纂所所蔵『南島雑話自一至二』には、出家流人について「出家流人と成る時ハ坊主頭ノ前ニ少し毛を立る如図又帰倭出家になるの志あれハ皆如此還俗外也」とあり、前頭部に毛が立っていないので、

藩ノ能枯レタル長キ茅ニテ根ヲ内ニ入レテ葺タラハ根ノ方大キ故大風ニ抜ル事ナク」とあり、茅の保存力の良さと台風に強いという特徴を指摘している。この屋根の葺き方は、トカラ列島の口之島を北限とし、南は東南アジア大陸部の少数民族まで広がりを持つ技術で、日本の屋根の葺き方が穂先を上に向け内側に入れて葺いていくのとは大きな違いである。これもまた、『南島雑話』と同レベルの微細な奄美の民俗知を基にして描かれていることを示すものである。

第三景

左上上に奥山から流れ落ちる滝が描かれ、その下に広がる中山のバシヤヤマ（糸芭蕉山）が広がる。右手に左右山に囲まれた先に開ける青い海が描かれ、集落の存在を認識させる。こうした海や集落が見えない奥山、中山の存在を考えると、この場面は大和村の福元盆地から東シナ海に面した集落への道を想定させる。因みに、『大嶋古図』に見えるバシヤヤマの記事は、大島の南部の海岸近くに二箇所ある。ナカヤマに葉が緑滴り、幹も熟したバシヤヤマが三方の山の斜面に豊かに茂る。



『琉球眞景』第3景部分拡大 S

時期はバシヤ切り時の二月から三月であろう。溪から上る細い山道をバシヤタバイ（芭蕉束）を担いで上る男女の姿が描かれる。先を行くのがヲト（夫）、後からついてゆくのがトウジ（妻）であろう。着物は男

の着ているものも、女の着ているものもいずれも手紡ぎのバシヤイトで手織りしたバシヤギン（芭蕉衣）で、丈が膝の高さぐらいあり、ワンピースの着物であることが特徴である。特に男のバシヤギンは藍染めされておき、深い藍の色が印象的である。さらに、女性が頭に被っている物は、ウツクイ、サージと呼ばれる藍染めの木綿の布である。この絵では定かではないが花織りの可能性もある。これは、髪が乱れを防ぐだけの目的ではなく、頭から侵入しようとする悪霊を排除する機能も持っていたと思われる。また、こうした形や機能を持つ被り物に、ノロが祭祀の際に頭に巻いたカミサージがある。手紡ぎの白の木綿糸で平織りされた布で、片端は径糸を撚り合わせて房状にしてあり、魔除けの呪いがなされている。その房の付いている方を頭から背中に垂らしていた。現在、名



浮き織りのシュバ 大島郡与論町

瀬市立奄美博物館が所蔵する花織りの「カミサージ」や大島郡与論町の国指定重要無形民俗文化財・「与論十五夜踊り」の踊り子たちが頭に被るシュバと呼ばれる浮織りの布がある。かつて、シュバにはその一端に卍の文様の施されていたものがあり、踊り子に近づく悪魔を祓うための文様で、その文様の付いている方を頭から背中に垂らしていたと言われる。第七景に描かれている女性たちが被る被り物も同じものである。

また、背負っているティル（背負い籠）に入れられている物は、バシヤヤマで伐り倒したバシヤの皮を剥いで束ねたバシヤタバイである。

ティルは、胴がやや括れ、上部にミミ（耳）がほぼ同じ高さの位置に五個取り付けられ、それにオ（緒）を通し額に掛けて背負っており、上江洲均が言う奄美型であることが解る。このティルの描写は「南島雑話」



釜で煮られるバシヤタバイ 大島郡与論町

が描いたものよりも遙かに写実的である。

ティルの縁には四本の棒が立てられ、上下二段に紐が掛けられ、バシヤタバイがティルの縁を越えてよりたくさんを積み上げる工夫が認められる。男の左手はオに掛けてずり上がるのを防いでおり、その重さの程が押し量られる。バシヤタバイは家に持ち帰られた後、地炉灰汁の入った大釜で煮られ、糟を取り除き割かれてフ（苧）にされる。フはそのまま売られたり、自家用として一本一本繋いで、繕りをかけて糸を紡ぎだし、機に掛けて布を織りだし、バシヤギンに仕立てられるのである。奄美では、バシヤヤマが嫁入りする娘の財産として扱われるほどに価値があったと言われる。弓削正己氏によれば、奄美の芭蕉は琉球域内の交易品として、沖縄のものよりも高い評価を得ていたという。

第四景

左右と背後を急峻な山に囲まれ、前方に海が開けるという奄美大島のシマ（集落）の典型的な景観を描いた絵である。ほぼ中央に茅葺きの家の屋の塊、そのほぼ中央には第一景と同じくひと際大きな家が描かれており、この村のユカリツチュの家であろうと思われる。また、集落の背後

に神山らしき盛り上がった山が描かれている。その左手の上部の鞍部から集落の背後に九十九折に落ちてくる道には階段らしきものが敷設されている。また、集落左手には怒濤逆巻く岩場が描かれ人の通行を遮っている。さらに、集落の右手奥には水田と、黍畑にヤドリ（作小屋）が見える。さらに、その左奥には、大木を五本ぐらい残した黒々とした地面が広がるが、これは「アラヂバテ」と呼ばれる焼き畑であると思われる。「アラヂバテ」が開かれていることを考えると、この場面も春先の季節を描いたものと考えてよい。集落の右手外れに川が流れ、浜に流れ込んでいる。その河口の右手は、松の生えた岩礁の岬となっており、その奥を隣の集落へ続く道が通っている。こうした配置は、『大嶋古図』の描くところの「名音村」と一致する。九十九折の道は戸田村から越えてくる道であり、鹿児島大学図書館所蔵『南島雑話二』の「峯谷山川坂路之事」にある「戸田村より大和濱方名音村へ越る坂」で、「別て高くして難場なり」と記した大嶋島内の十六の坂道のうちの一つである。また、怒濤逆巻く岩場は徳浜に続く現在の名音トンネルの所である。さらに、右手の岬の道は志戸勘集落に続く道で、手前の岩礁も『大嶋古図』の描くところと一致する。また、集落の背後の山はテラヤマに当たると見てよい。こうしたことから、この場面の集落は「名音」であると断定してよからう。

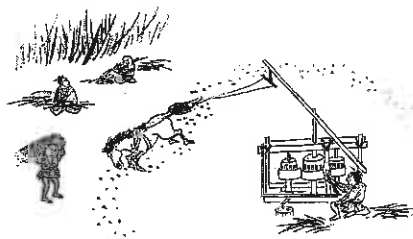


『琉球眞景』第4景部分拡大 S



『琉球眞景』第5景部分拡大 S

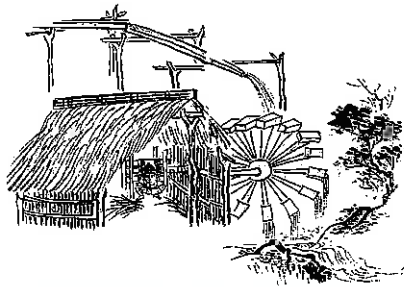
ニテ一ツツ宛拭シニ車立アルナリ、(中略) 此試ノ砂糖出来ノ善悪ニ依リテニ番車立ノ日取ヲ究ム凡十二月十日前後ナリ三番車立ハ島中惣テ残リナク車立是ハ凡十二月二十日前後ナリ」と記しており、水車まで稼働していることを考えれば、既に本格的な三番車立に入っていると見ることができると言える。



『大嶋漫筆全』東京大学編纂所蔵

その作業の様子を見ると、中央奥では男たち二人が黍刈りに励んでいる。そのうち一人は、刈り取った黍を担いで袴を落として二人の女性の所へ運んでいる。さらに、袴を落とした黍を搾り機に運ぶ女性、絞りかすを運ぶ男性が描かれる。そして、馬と三転子式のサタグルマ（砂糖搾り機）による砂糖搾りの様子と、おそらく砂糖炊き用と思われる小屋が描かれる。さらに川を隔てて左横には砂

黍刈り、黍搾り、耕作地の打ち返しなどの農作業の様子を描いた絵である。場所は、第四景の右手奥の黍畑とサタヤドリの辺りと考えてよからう。また、その時期は、砂糖絞り作業が中心となっている点と、画面右端の小屋の脇に寒緋桜と思われる桃色の満開の花が咲いているところから、旧暦の正月前後の頃であることが分かる。東京大学史料編纂所蔵『大嶋漫筆全』の「砂糖製法ノ事」には、「霜月廿五日ハ毎年一番車立ノ定日ニテ村々



『大鳴漫筆全』東京大学編纂所所蔵



水車による砂糖搾り ラオス・ボンサリー県ワータイ村(タイル族)

られる。文化八年柏有度が発明した金輪車は、天保十二年頃までは一、二ヶ村に過ぎず、天保十三年になって普及したとされる。¹⁰⁾
次に、水車に



『琉球眞景』第5景部分拡大 S

その奥には、笕で水を引いて落水方式で回している水車が二台見え、水車の横には水車と連結する砂糖絞り小屋と、これも砂糖炊き用と思われる小屋の二つが描かれている。

まず、縦型三転子の砂糖絞り機について見てみよう。三転子の構造を見てみると、真中に凹凸式の歯車が切られており、砂糖黍はその歯車の部分を通過させている。しかし、これでは絞れないことは言うまでもなく、本来絞るべき部分は広い隙間が認められる。また、従来言われているようにこれ



水車による砂糖搾り ラオス・ルアンパバーン県チャーナンタイ村(タイル族)

に咬み合わせて、下段の軸を水車の主軸に連結させた構造のものである。搾り部の両軸の隙間は、軸受けの左右の柱の上部に打ち込まれた楔によって調整される。手前と向こう側に一人ずつ座り、手前から砂糖黍を差し込み搾り、二度目に度搾るときは手前の側に一度搾った黍柄を渡して再び差し込んで搾るといふ方法をとる。また、奄美の三転子の搾り機が一度搾った黍柄を折り返して再び搾るのに比して、二転子の搾り



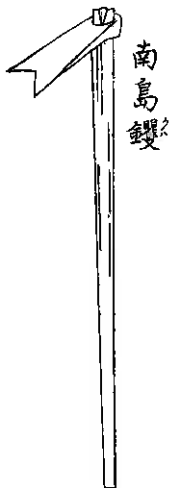
水車による砂糖搾り ラオス・ボンサリー県ワータイ村(タイル族)

ついて考えてみたい。この水車が何の目的で設置されたものかは定かではないが、東京大学史料編纂所所蔵『大鳴漫筆全』の砂糖搾りの図を見ると、馬による縦型の三転子式サタグルマの外に、水車の主軸の上下に軸を置いた横型の三転子式サタグルマで搾っている図が描かれているところから、この二つの水車も砂糖絞りのための水車と考えて良いであろう。二〇〇四年一月二二日に、中国・雲南省西双版納との国境近くのラオス・ボンサリー県ワータイ村(タイル族)のウー河で見た、

機は効率が落ちることが分かる。しかし、二転子と三転子との違い、流水方式と落水方式との差はあるものの構造的には同一のものであると言って良い。

このことは、馬や牛が引く縦型の回転式でも同じことが指摘でき、縦型横型ともに深く繋がった縁戚関係にあることを物語っている。現在の段階では、ラオス北部、ベトナム北部においては三転子式のサタグルマを見ることがないところから、あるいは奄美、沖縄諸島で改良されたものである可能性も考えられる。ただ、ラオス北部、ベトナム北部で見られる縦型二転子の歯車の構造は、螺旋式のものであり、凹凸の歯車を確認できていない。こうしたことを考えると、三転子で凹凸の歯車を持つ縦型の搾り機は、奄美、沖縄諸島で開発された可能性が考えられる。元和九（一六二二）年に沖縄に移入された製糖法は二転子であったという仲原善忠の沖繩タイムス誌上における指摘や、尚貞王三（一六七二）年に首里の真喜屋実清が三転子搾り機を発明したという記事は、これから十分に検討されるべきであろう¹¹。今後、中国西南部、ラオス北部、ベトナム北部の情報の積み重ねによってさらに明確になってくることが期待される。

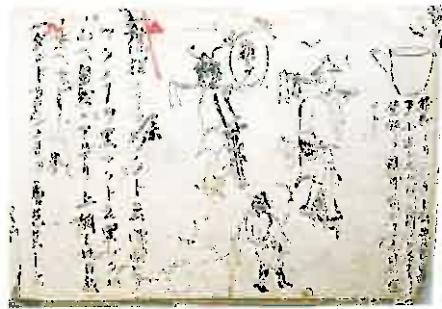
次に、耕作地を打ち返す三人の男たちを見てみよう。名護博物館の比嘉武則は、この作業を「田仕事」と呼び、「水田で鍬を振る男たち」と



南島鍬 『成形図説』第二冊 国書刊行会

理解している。しかし、そうであろうか。その答えを与えてくれるのは、この男たちが使っている鍬である。奄美大島で用

いられる水田を打つ鍬は、ヒルバ（広刃）と呼ばれる幅の広い鍬であり、



『南島雑話 雑記下書』 名瀬市立奄美博物館所蔵

少なくともここに描かれている鍬は幅の狭いものである。しかも、第七景の右から四人目の女性がテルの側面に取り付けている鍬とほとんど同一の形であり、その女性が畑作作業からの帰りであることから考えれば、この場面に描かれた鍬も畑作用の鍬であり、当然のことながら作業も田仕事ではなく畑仕事であり、砂糖黍畑を打ち起こして次の砂糖黍上の準備をしていると理解した方が妥当である。奄美大島で黍畑を打つ

トウゲは、刃と柄の取り付け角度がほぼ九〇度の打ち鍬で、堅い黍の切り株を起こすために切れ味と重さが必要なため、刃の両端が土に食い込むように三日月型に成形され、重量も三斤（約一八〇g）の重さに作られている。笠利地域ではサンギントウゲ、徳之島でもウギフイトンゲ（黍掘り唐鍬）と呼ばれていた。こうした特徴を持つ奄美の鍬は、薩摩藩が文化元（一八〇四）年に刊行した『成形図説』に「南島鍬」として



マックウツ 中国広西壮族自治区羅龍農貿市場（社族）

て絵入りで紹介され、鹿児島県の鍬とは異なる特徴を持つ鍬として記録されている¹²。また、名瀬市立奄美博物館所蔵『雑記下書』には「雑事」として、ハブ咬傷によって片足を失った三人の男が担いだ鍬が、『成形図説』が指摘した南島鍬の特徴をみごとに描いて

いる。

ところで、『成形図説』はそこまでは触れていないが、これらのトウゲには大きな特徴が認められる。それは、ミン(耳)と呼ばれる柄を取り付けるソケット部分の成形の方法である。刃部の本体の肩の部分の両端を挟むように鍛接し、土に打ち込んで柄を起こしても耐えられるように頑丈に作られている。また、柄の根元の部分が太く削り出され、ミンに差し込まれ抜けないように柄の木口に楔が打ち込んであるのも『成形図説』が捉えている「南島鏝」の特徴である。この形の鍬は、中国広西壮族自治区碩龍農貿市場で売られていたマックウツ(鍬の刃)と同じものである。この地域の壮族は、刃先が三日月型のものを好み、山に住んでいる人が木の根を掘ったりするのに使うといい、焼畑耕作と関わりのある鍬である。奄美における砂糖黍栽培は、こうしたトウゲや先に指摘



オモゲを付けた与那国馬 沖縄県与那国町

した砂糖絞りの技術を伴って導入されたものであることが、東南アジア大陸部の少数民族の文化との比較を通して明らかになってくる。さらに、本場面で注目されることに、二頭の馬がはめている制御具がある。この制御具は口に嚙ませる金属製の物ではなく、棒あるいは板を頬に当てて馬の動きを制御するオモゲである。同様の絵は、第七図の高倉の中に繋がれた馬にも見られるものである。これは、馬の顔を二本の棒で挟んで締めている。上端の穴に通した綱を鼻骨の上に、中央の綱、下端

端の手綱を顎の下を通して馬の顔に当て、中央の穴から延びた長い綱を

耳の後ろに回して取り付ける。手綱の一端を引くと、二本の棒は上端の

連結部が支点となって間隔が狭まり、鼻骨に痛みが走るため、馬が指図どおりに動くというものである。奄美・沖縄のものは制御の効果を高めるために、中央部に突起を設けてあるのが特徴で、馬のみに用いられている。それに対して、鹿児島のはイタオモテと言われるように、桑の木や竹の直線的な板で作られており、馬だけではなく牛にも用いられている。こうした制御具は、ラオス、ベトナム北部などの東南アジア大陸部でも用いられている。それは、S字状に成形されているものの板状で突起部が見られず、鹿児島のはイタオモテに近い形をしており、突起部を設けてあるのは奄美、沖縄諸島に見られる特徴で、奄美・沖縄で独自に改造されたものであると考えられる。民俗的伝承から



ラオス・ウドムサイ県コーノイ村付近(タイヤン族)

考えると、『琉球写真景』の馬がオモゲをしているのは当然であるが、名瀬市立奄美博物館所蔵『雑記下書』の女の横鞍乗りや東京大学史料編纂所所蔵『南島雑話自一至二』の双角の馬、嶋人の旅、「廻島之図」、同『南島雑話三』の「荷卸ノ圖」、「砂糖製ノ圖」、「馬競圖」、同『大嶋漫筆全』の「砂糖製法ノ事」、

同『南島雑記全』の「婚姻之事」、鹿児島大学図書館所蔵『南島雑話二』の婚姻行列の図、同『南島雑話五』女の横鞍乗り、双角の馬、嶋人の旅などの各図に描かれた馬には全く見られないものである。誠に不思議なことと言わざるを得ない。これなどは、『南島雑話』よりも『琉球写真景』のほうがはるかに奄美の民俗を正確に写し取っている例といっ



ウンジョウ 瀬戸内町加計呂麻島 黎明館蔵

同館所蔵『大崎竊覽』の「麦作能事」の項と鹿児島大学図書館所蔵『南島雑話三』の「麦作能事」の項に描かれたテイルを担いだ先頭の女性は、横縞模様の強調された袖無しを着ているのが確認でき、男女を問わず着られていたことが分かる。また、奄美の民俗を研究した恵原義盛氏は、その著『奄美生活誌』で、「オンジョギン」という項目を設け、「大正時代に老女がジバタ



『南島雑話三』鹿児島大学図書館所蔵

て良い例であろう。

また、砂糖絞り機の手前に座る男性が着ている袖無しは、「ウンジョウ」と呼ばれる裂き織りの着物である。これは、古布を裂いて緯糸に用いて織られているところから、厚みを持つており防寒着として用いられたり、担ぐ荷物によって肩や背中が擦れることや、着物が擦り切れることを防ぐための着物として着られていた。鹿児島県立図書館所蔵『大崎便覧』には「ランヂョ 背負衣裳ニテ字義ト云 下賤の男女 樵島作等ニ着ス 桜島の荷布ト云ヘルモノニ地合仕立變ル事ナシ」とあり、



ニンブ 下甌村瀬々之浦 黎明館蔵

(地機りるざりばた)でオンジョを織っていたのを見たことがあるが、それは俗にアミソという木綿の網糸をカセ(経いたていと)とし、コホ(布切り古布)を細く裂いたものをヌキ(緯よこいと)として織っていました。コホは古着などですから裏地の紺と表地の白や黒を交互に織り、虎模様のようなのでした」と言い、袖付きで長着のオンジョとオンジョを織るジバタの図を紹介している。その機能として、その分厚さが木や蔓の棘から狩猟者の皮膚を守ること、猟師の日焼けを防ぐことなどを挙げている。いわゆる、裂き織りと言われる織物である。こうした機能をみると、端切れを幾重にも刺し子にしたツツイやドンザといわれる猟師や漁師が着る作業着に近いものである。

このウンジョウと織り方、機能ともに同じものは奄美に限らず、先に紹介した鹿児島県立図書館本『大崎便覧』の「ランヂョ」の項にある桜島の荷布(ニンブ)や東中国海に浮かぶ甌島の下甌村瀬々之浦(現薩摩川内市)のニンブ(荷の布)があり、鹿児島にも分布することが分かる。因みに裂き織りは東北青森まで分布することも分かっている。また、ニズリ(荷擦り)という熊本県球磨郡五木村の刺し子の袖無しも、裂き織りと刺し子との違いはあるが、名称や機能から同系統のものであろう。

第六景

この場面は、八月踊りのヤーマワリ(家廻り)を描いたものである。



チヂン 大島郡伊仙町 個人蔵



一列楔のヂュー ラオス・ルアンナムター県ナムルー村（ランテン族）



4列楔のコーン ラオス・ルアンナムター県コブアン村（タイダム族）



5列楔のコーン ラオス・ルアンナムター県ナーノイ村（タイダム族）



『琉球嵐真景』第6景部分拡大 S

渡した紐を外側に押し出し、皮の張りを強くすることで音を高くし、逆

つまり、楔を打ち込むことによって皮に掛け
 一列の楔によって調律する楔締め太鼓である。
 して、胴の外側の側面の中央に一周、隙間な
 く重ねるようにして紐の下側に打ち込まれた
 胸部の両側に皮を張り、その皮に紐を掛け渡
 性が持つていることが分かる。このチヂンは、
 つの円が作られ、チヂン（楔締め太鼓）は女
 踊りの輪は、ほぼ男性と女性とに別れて一
 有力者の屋敷であることが推察される。
 のユカリツチュとかシユウタというシマの
 周囲は竹壁で囲まれ、広い庭には池や築山が配され、家屋は見えないも



ヂューの楔部拡大 ナムルー村（ランテン族）



3列楔のヂュー タイ・チェンライ県バンパドゥワ村（ヤオ族）

に楔を緩めることで皮の張りを緩くし音を低くするというものである。こうしたチヂンの日本列島における分布は、喜界島、奄美大島、徳之島には各集落に複数個見られるが、沖永良部島には世之主神社に、与論島には琴平神社に各一個ずつ存在し、沖縄諸島には分布しない。しかし、東南アジア大陸部においては、ヤオ族ないしはその支族の間に認められているものであり、楔の列も一列、二列、三列、四列、五列のものが分布していることが分かっている⁽¹⁶⁾。ただし、ルアンナムター県コプアン村とナーノイ村の四列、五列のコーンは、隣接するスートツ村に住むランテ族のヂューの影響を受けて大型化したものであると思われる。

この絵に描かれたチジンの持ち手は、すべてが女性であることが分かる。現在の奄美諸島の民俗的伝承におけるチジンの持ち手が、瀬戸内町や宇検村など奄美大島の南部と徳之島では男性であり、奄美北部は女性であるところから、この場面は宇検村や瀬戸内町などの奄美大島の南部を描いたものではなく、むしろ大和村や住用村から北の集落を描いたものであることが指摘できる。

輪の中には、家の主人から供された焼酎とシヨウケ（肴）が見える。シヨウケは、サンバラに入れられ臼に乗せられているが、奄美では珍しい寸胴型の臼であることが分かる。輪の中に描かれた男性と女性が踊り手たちをもてなしている。

また、踊り手たちが着ている着物を見ると、藍染めと思われる青みがかった無地のものが大半で、草木染めと思われる緑系統のものが十人、紺と思われる白地に藍色の文様のものが六人ほど、大島紬と思われる黒っぽいものが四人ほど見られ、その衣料の文化がよく分かる。

さらに、女性の髪のかき方も注目される。それを見ると、前頭部で

結っている形、頭のとっぺんで結っている形、後頭部で結っている形、左の側頭部で結っている形、右の側頭部で結っている形が見られる。

こうした髪のかき方は、第九景の三人の女性にも明確に見られる。豚を引く女性と子どもを背負っている女性の結髪は、いずれも前頭部に結っているのに対し、桶を持つ女性は右側頭部に結っている。奄美大島ではこうした結髪はトノシビ（唐の髪型）と呼ばれるものである。恵原義盛は「明治の末頃から若い女のトノシビは次第にすたれ、ソクハツと称する髪になり、大正になるとフテガンと称するものが娘たちの髪型になりました」と記し、頭のとっぺんで髪を結いギハ（簪）を挿したトノシビ姿、後頭部で結いギハを挿さないソクハツ姿、髪をふっくらと膨らませて頭のとっぺんより少し後ろに下がったところで結いギハを挿さないフテガン姿を描いている⁽¹⁷⁾。因みに『南島雑話』が描く女性の髪型も恵原が描く頭のとっぺんで髪を結いギハ（簪）を挿したトノシビ姿のみである。ただ、鹿児島県立図書館所蔵『大嶸便覧』の「生芭蕉ヲ續ム」図の女性の髪が前頭部に結っているように見えないこともない。しかし、東京大学史料編纂所所蔵『大嶸便覧』の同図を見ると、やはり頭頂に結いギハを挿した図である。それに比べると、『琉球寫眞景』が描く女性の髪型はバラエティーに富んでいる。これもまた、第五景や第七景の馬のおモゲと同じく『南島雑話』の作者が描かなかった点であり、『琉球寫眞景』が『南島雑話』を越える情報を基に描かれていることを示すものとして興味深い問題である。

一方、こうした『琉球寫眞景』が描く女性の五つの髪型は、筆者がこの一〇年間で撮影したフィルムから選んだだけでも、ラオス北部の少数民族の女性の髪型の中にその類型を見ることができる。例えば、前頭部



頭頂の結髪 ラオス・ボンサリー県ナムカム村 (タイダム族)



『琉球眞景』第6景部分拡大 S



後頭部の結髪 ラオス・ボンサリー県ナムカム村 (タイダム族)



『大嶋便覧全』 東京大学編纂所所蔵



右側頭部の結髪 ラオス・ルアンナムター県ナムレツ村 (タイルー族)



額の結髪 ラオス・ボンサリー県ムチバンカ村 (アカ族)



左側頭部の結髪 ラオス・ルアンナムター県ルアンナムター市内 (タイルー族)



額の結髪 ラオス・ルアンナムター県チャラ村 (クイ族)

で結っている形は、ミャンマーとの国境に近いルアンナムター県チャラ村（クイ族）や、ルアンナムター近郊のモン族、中国雲南省西双版纳国境に近いポンサリール県ムチバンカ村（アカ族）などに見られる。

また、頭のとっぺんで結っている形は、ルアンパバーン県ムンゴイ郡ノンケオ村（ラオ族）、ベトナム国境に近いポンサリール県ムンクアール郡ナムカム村（タイダム族）などで見られる。さらに、後頭部で結っている形は、ルアンナムター県ルアンナムター郡ナムルー村（ランテン族）やウドムサイ県ウドムサイ郡ムンラー村（カム族）、ポンサリール県ブンタイ郡ブンタイ村（タイルー族）、ポンサリール県ムンクアール郡ソプナオ村（タイダム族）、シエンクアン県サン村（ラオ族）など多くの民族の間で見られる。また、左の側頭部で結っている形は、ウドムサイ県ムンサイ郡ナムレーン村（カム族）やルアンナムター近郊のタイルー族で確認できる。さらに、右の側頭部で結っている形は、ルアンパバーン市内のラオ族の老女の髪に認められる。

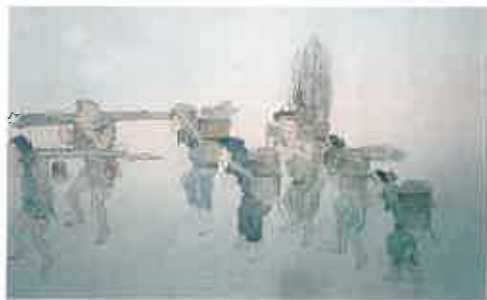
こうしたラオス北部の少数民族の女性達の髪型と、『琉球寫真景』に描かれた奄美大島女性達の髪型との一致が何を意味するかはにわかには即断できないが、少なくとも、奄美大島の女性の髪型がこうした東南アジア大陸北部地域と共通の文化の中にあることだけは確かなことであると
言わざるを得ない。

第七景

本場面は、中央に高倉が描かれ、その中には第五景に描かれた馬と同じく、オモゲを付けた馬が繋がれている。右手には焼き畑の伐採作業から帰ってきた男性二人、女性五人が描かれ、左手には海の漁から帰って

きた父子と思われる二人の男性が描かれ、いずれも裸足で歩いている。先ず、高倉の図は、第二景に描かれたものと同じヨツマタグラと呼ばれる四本柱の構造である。その中に繋がれた馬がオモゲを付けているのも第五景の馬と同じである。

次に、右手の人物群を見てみたい。描かれた男性二人と女性たちの姿は、東京大学史料編纂所所蔵『南島雑記全』の「薪之事」の項に記された「薪ハ吾藩ノ如一時多ク取タクワヘ置ク事ナク作婦リニ男女共銘々持帰ルナリ柱ノ如キモノヲ薪ノ尺ニ切形ヲ付テ軽クナシテ一本持帰ルモアリ或ハ大抵ノ程ニシテ長キモノヲ二三本持帰ルモアリ或ハ生木の棒ノ程ニシテ長キモノヲ数十本持ルモアリ或ハ薪尺ニ切りテツツニ結合セテ持帰ルモアルナリ女ハ如圖皆テルトイヘル手籠ニ薪ヲ入レテ持帰ルナリ或ハ枯薪ヲ一丈廻リ計リ能結ヒテ背ニ負テ女持是ハ男ノ持テルヨリ遙ニ



『琉球寫真景』第7景部分拡大

多シト云此嶋大山故ニ生木ヲ焚ク事ナク家々多クハ枯薪ヲ取り焚クナリ依リテモユル事絶妙ナリ」の記事と図にほぼ一致する。

先ず、男たち二人を見てみよう。いずれも伐採した木を一本ずつ担いで、左腰にはそれを伐採するのに用いたと思われる斧を差している。享和年間の奄美大島では焼き畑の木の伐採に斧が用いられていたことを示すものである。さらに注目すべきは、木の担ぎ方である。手前の人物が木の根本の方を両手で押さえてバランスを取っているのに対して、奥の人物は右手で根本の側を押さえ、左手は一本の棒を持って木の末側の下に差し込み、

支えるようにしてバランスを取っている。こうした支え棒を利用する木の担ぎ方は、先に示した東京大学史料編纂所蔵『南島雜記全』の「薪之事」の項には含まれていない。これもまた、『南島雜話』を越える情報である。昭和三十一年九学会連合の奄美調査に参加した写真家芳賀日出男は、奄美大島の北部龍郷町で棕櫚蓑を着た男が、左肩に束ねた木を根元を先にして左手で押さえて担ぎ、右手に持った棒を右肩から木の東の下に差し込み支えながらバランスを取っている姿を記録している。これは、少なくともその当時までこうした運搬法が行われていたことを示すものであると理解してよからう。

しかし、この運搬法は奄美に限られるものではない。先ず、奄美の北側の分布状態を見てみよう。鹿児島県歴史資料センター黎明館が所蔵する「カタボウ」と呼ばれる担ぎ棒と、それに伴って用いられる「カタアテ」と呼ばれる綿入りの分厚い肩当ての存在は、それを明確に物語る。



カタボウ（下から）瀬上、里、中野 黎明館蔵

収蔵されている「カタボウ」は、旧薩摩郡（現薩摩川内市）上甕村瀬上、同村中野、同里村里の三点収蔵されており、いずれも東中国海に浮かぶ上甕島に分布するものである。このうち上甕村瀬上の「カタボウ」は、長さが一〇五・五センチメートル、中央部直径四・七センチメートルの楕円形の本と思われる自然木で、肩に当たる部分が肩に馴染むように逆U字形に窪み、荷の材木を支える面は平らに削り出されている。荷に当たる方が根元で、手で支える方が末に

なっている。大きな材木を担ぐときに、両肩に重みを分担させ、前後のバランスを取るための道具で、背後で荷の材木とX状に交差させて用いる。この「カタボウ」は、「カタアテ」とともに用いるものである。

「カタアテ」は、長さ五〇・〇センチメートル、幅三五センチメートル、厚さ三・〇センチメートルの横長の楕円形で、頸のはいる部分をU字形にし、両端から頸を巻くように紐が付けられたものである。白い木綿の布の中に綿が詰められ、両肩に当たる衝撃を和らげ、肩の荷擦れを防ぐ機能を持っている。里村里のものもほぼ自然木の曲がりを用いている点と、荷に当たる方が根元で、手で支える方が末になっている点は同じであるが、荷に当てる部分は、肩を当てる部分からほぼ直角にL字形に曲がっている点が異なる。また、上甕村中野のものは里のものとはほぼ同じ構造を持つが、全体が刃物で削り出されているのが大きく異なる。

一方、南に目を転じるとどうなるであろうか。筆者は、二〇〇四年十



カツギボウを用いた竹の運搬 ラオス・ウドムサイ県ナーモン郡マップ村（モン族）

二月二五日に、ラオス北部ルアンナムターの町から中国雲南省との国境の町ムアンシンとの道中で、民族名は聞きそびれたが、この運搬法で木を担いでいるモン族と思われる男性を確認した。また、二〇〇五年一月四日には、ラオス北部ウドムサイ県マップ村（モン族）で、左肩に担いだ竹の束の根本側を左手で押さえ、右手に持った棒で木の末側の下を支えるようにしてバランスを取って運ぶ男性を見ることができた。さらに、二〇〇五年一〇月

二六日にラオス北部ウドムサイ県ナーモン郡（モン族）では、左肩に担

いだ木の根本側を右手で押さえ、左手に持った山刀で木の末側の下を支えるようにしてバランスを取って運ぶ男性を見ることができた。こうした事例は、この運搬法が奄美特有のものではなく、日本の枠を越えてアジアに広がる運搬法であるということを示している。

さらに注目すべきは、先頭の男がウンジョウと呼ばれる袖無しを羽織っていることである。これは、第六景に描かれた砂糖搾りの男性がきっていたものと同じ裂き織りであり、この場面が第六景と同じ寒冷の時期を描いていることは間違いない。

次に、五人の女性たちについて触れてみたい。先頭の二人は頭にウツクイと呼ばれる藍染めの被り物を被り、その端は首筋から背中へ垂らすように被っていることが分かる。後ろ三人の女性の髪型は、トノシビ（唐結び）と言われる丸髻にギハ（笄）を挿している。

そして、いずれもテイルという背負い籠を背負っている。それは、籠の胴の上部に付けたミミ（耳）を通して胴部を巻いたテイルノオ（テイルの緒）を額に掛けて、背中に背負っていることが分かる。この背負い籠は、日本列島では奄美大島、喜界島、徳之島、沖縄本島北部、伊豆諸島、北海道アイヌなどに飛び石的に非連続的な分布を見せる。奄美の北のトカラ列島でも奄美大島から移住してきた人々の間で用いられているが、トカラの「シタミ」とは区別されて「オオシマテゴ（奄美大島籠）」の名前で呼ばれている。

一方、東南アジア大陸部ではこの種の背負い籠は、タイ族系の民族を筆頭に、アカ、カム族などの人々の間に担がれている。こうした周辺地域の少数民族の文化を視野に入れてみると、鹿児島から南西諸島の四類型の背負い籠は、東南アジア大陸部では民族ごとに分類され、従来言わ

れてきたように、テル型の背負い籠が日本列島の背負い籠の原型であるというような系譜論で理解されるべきものではなく、民族文化の差異として理解することが妥当であると考えられる¹⁸⁾。

また、二番目の女性はテイルノオを額に掛けずに、両肩に掛けそれに両手を掛けて担いでおり、テルの側面にはトウゲと思われる柄の角度が直角に近い打ち鍬が結わえられているのがわかる。これに対し、先頭と三番目の女性は、テイルノオを額には掛けているが、手を掛けていない。さらに、四番目と五番目の女性は、額に掛けたテイルノオを下の方角に引き下げるように両手を掛けている。こうしたテルの担ぎ方について、現在でもこうした三つの担ぎ方とを見ることが出来る。恵原義盛氏も『奄美生活誌』で、額に掛けずに肩に掛ける負い方を「ワツケリ」と呼び、額に掛ける負い方を「カツケリ」と呼び分けている。

こうした奄美大島における額負い背負い籠の担ぎ方の類型は、ラオスを中心とする東南アジア大陸北部にも共通して見ることのできる方法である。

女性達が担いでいるテルの中身の中心は甘藷で、それも満杯状態に盛り上げて詰めてある。この芋の詰め方も鹿児島大学図書館所蔵「南島雑話三」の「甘藷植乃事」の項に描かれているとおりである。さらに、先頭の女性の芋の上には横にしたツバシヤ（石路）らしきものが載せられている。また、三番目の女性は薪を縦に立てて背負い、緑色の莫塵を横に乗せて背負っている。四番目の女性も薪と緑色の莫塵を横に背負っている。こうした姿を見ると、小野重朗が言ったテルノオを用いた背負い方が、縦型の荷物を背負う方法だという考え方には、若干の疑義を挟まざるを得ない。ラオス北部で見かける薪を横にしてテイルの緒と同じ負



テーの額負い ラオス・サムヌア県ナティアン村 (タイデン族)



ティルの担ぎ方1 大島郡瀬戸内町 加計呂麻島



カの多様な担ぎ方 ラオス・ルアンナムター県モンシン市場近く (アカ族)



ティルの担ぎ方2 大島郡瀬戸内町 加計呂麻島



袈裟懸けの担ぎ方 ラオス・ウドムサイ県 (カム族)



ティルの担ぎ方3 大島郡瀬戸内町 加計呂麻島



額負いの横荷運搬 ラオス・ルアンナムター県ルアンナムター市近郊 (カム族)



腰に付けたカタギイテゴ 始良郡蒲生町

次に、左側の漁帰りの二人の男を見てみよう。前方を歩く男は、左肩にヨホ（櫂）を担ぎ、そのヨホにはエラブチ（青ブダイ）らしい青い色の魚を、頭と尻尾を括って弓形に曲げて掛け、さらにイベラク（魚籠）を掛けている。注目されるのはこのイベラクである。このイベラクは、方形の胴部を持ち、首が括れ、口がラツパ状の広口になっているのである。これは、右側の先頭の男が担いだ木に下げたイベラクが丸胴で、首部が括れて、口がラツパ状に広がっているとは大きく異なるものである。こうした方形胴部首括れ広口魚籠は、



『琉球嶋真景』第7景部分拡大 S

い紐で額負いする方法は、今後検討すべき問題である。こうした背負っているものから描かれた場面の季節をほぼ推定できる。つまり、二人の男たちの担いでいる木や薪は、旧暦一月から二月にかけて行われるアラヂバテ（焼畑）で伐採された木やその枝葉と考えることができ、正月前後に出たツバシヤの新芽は大晦日の年越しに食べるワンフニ（豚骨料理）に混ぜて焚くものであり、本格的に収穫されたと思われる甘藷もフユンメ（冬折り目）を過ぎてからであろう。ウンジョウウを着ているのも寒冷の季節である。



腰に付けたモーン ラオス・ルアンナムター県モンシン郡（タイル一族）

日本列島では、徳之島、奄美大島、喜界島、大隅半島、薩摩半島、九州山地に吹き溜まった状態で分布する。この地域以外で確認されているのは、佐賀県の有明海沿いに一点、岐阜県に二点に過ぎない。

一方、南に目を転じると、沖永良部、与論、沖縄諸島を飛び越えて、台湾、フィリピン、ボルネオ、インドネシア、マレーシア、タイ、カンボジア、ラオス、ベトナム、中国・広西壮族自治区、雲南省、ミャンマー、ネパールと分布し、西はネパールまで分布することが分かっている。しかも、南九州でも東南アジアでも胴部から首の括れに繋がる「カタ（肩）」と呼ばれる部分が、斜めになっている型、水平になっている型、ほんの少しカタを形成する型に分類することができる。そのうち

奄美大島の住山村山間と徳之島町母間、佐賀県東与賀町で確認されているのは、ほんの少しカタを形成する型である。この男がヨホに掛けたイベラクはこれに当たると思われる。特にこのカタを小さく成形する型は、ラオス北部のタイル一族の間で作られ、使用されているものである。

右手には、弁当や釣り道具などを入れて持ち運ぶ円筒形の籠を提げている。網類や突き刺し漁の道具が見えないところをみると、舟による釣り漁の帰りであるかも知れない。

子供と思われるもう一人の男も、頭は鬘を結び、ギハを挿して、右肩にヨホを担いでいる。右手には方形胴部を持つイベラクを提げている。残念ながら口の辺りの描写がはっきりしない。

この図は、弓削政己氏によって既に指摘されているように、焼内湾入口である宇検村宇検集落、枝枝久島、屋鈍崎が描かれたもので、久志集



『琉球眞景』第8景部分拡大 S

落側の岬から眺めた風景であることは間違いない。右手の急峻な山に見える九十九折の山道は、現在の大和村今里集落に越す道で、鹿児島大学図書館所蔵『南島雑話二』の「峯谷山川坂路之事」にある「大和浜方今里村より宇検方へ越る坂」である。

画面中央には、第一景と同様に他の民家に比してひと際大きな家と、それに次ぐ大きな家が描かれている。これらの家は、与人の碇家や当時勢力を伸ばしていた鎮家であったと思われる。一般の民家の周りには竹垣がめぐらされているのが見える。また、その手前の石垣をめぐらし、大小二つの木の門を設けているのは行政的な性格を持つ施設であろうか。

さらに、この集落図の中で特記すべきは、民家群の左側の浜に描かれたムツマタグラ（六本足の高倉）とヨツマタグラ（四本足の高倉）の建物群である。これらは民家群とは切り離されて、ひとまとめにして立てられていることは一目瞭然である。いわゆる「ボレグラ（群倉）」と呼ばれるもので、集落の火災の延焼から穀物を守るための技術である。現在は、大島郡大和村大和浜の「ボレグラ」が、その民俗例として知られているが、一九世紀半ばころには大和浜以外の集落にもこうした「ボレグラ」の存在する風景が一般的であったことが分かる。民家群の近くに

も一棟あるが、これも石垣の外にあり、基本的には民家群と切り離されているものと考えてよい。

しかし、こうした集落に設置する高床の米倉を、民家群から一定の距離を保ってひとまとまりの「群」として建てる例は、奄美特有のものではない。筆者が歩いているラオス北部のルアンババーン県、ウドムサイ



集落から離れた穀倉群 ラオス・ウドムサイ県ナムレーン村（カム族）

県、ルアンナムタ県などのカム族の間には、それが顕著に認められる。例えば、二〇〇五年十一月十日に訪れたウドムサイ県ウドムサイ郡ナムレーン村（カム族）では、集落と川を挟んで建てられている群と、民家群から離れて集落の入口手前との二つの米倉群が認められた。その理由も奄美と同じく、火災から初を守るということである。因みに、『琉球眞景』には描かれてはいないが、ラオスにおける高倉の鼠除けや、

取り外し式の梯子の問題なども奄美・沖縄諸島との比較が可能な要素であることを指摘しておく。

また、「ボレグラ」の中には、イタツケブネと思われる大型の船を収蔵する船倉が一棟見える。おそらく、名瀬であるとか遠くのシマとの往き来に用いられる外洋船であると思われる。右手前の浜には、丸木舟と思われる小舟が二艘置かれ、漁をしているのか一人乗りの男がヨホで漕ぐ小舟が河口に一艘、同じく一人乗りの男がヨホで漕ぐ小舟がボレグラの浜の前に一艘、さらに、その左側に二人の男が漕ぐ小舟が一艘描かれている。それとは別に帆柱を持つ帆船が二艘描かれているが、これも外

洋帆走用の帆船であろう。特に、帆を下ろしている中央より描かれた大きな船には、艇と思われる小さな船が横付けされており、鹿児島島の仇を走る船であると考えてよからう。鹿児島大学図書館所蔵『南島雜誌五』の「嶋能大和詰役交代迎船圖」に描かれている、大きな帆船にイタツケで近寄っていく姿と同じと考えてよからう。

第九景

この図は、婦人が豚を連れて移動している姿を描いたものである。その豚は、全体が黒い色であるのが特徴で、これは在来種・シマワア



『琉球眞景』第9景部分拡大 S

(島豚)であると考えられている。特に、津波高志や比嘉武則は、この豚が種付けに連れて行かれる雄の種付け豚であることを指摘している⁽²¹⁾。しかし、津波が指摘しているように、引き手が女性であるというのが気になる場所である。栄喜久元は、昭和初期の与論島の豚の種付けに関して「路上でやせ型の豚がおじさんとよんでよい年令の人から追われゆつくり歩いているのをたまに見かけた。おじさんが持っている豚を追うむちはたたく用のものではなく、わき道に反らさない為のものらしかった。このようにして雄ぶたを雌豚のマキ(豚小屋・注川野)」に追い込み種付けさせたのである」という興味深い報告を行っている⁽²²⁾。豚を紐で繋いでいることは記していないが、ここでは女性ではなく「おじさん」が、手に持ったむちで制御しな



紐と鞭で豚を操る女性 シェンクワン県ボンサワン市場(民族名不詳)

がら、二キロメートルも離れたところから連れてきていたことが報告されている。この図で女性が引いていることから考えると、雄の種豚ではなく、雌豚か去勢した雄豚である可能性も捨てきれない。筆者は一九九

六年ラオス北部シェンクワン県のボンサワン市場で、村から売りに来た豚を買った女性が、右後ろ足に紐をかけ、その紐を左手で引き、右手に持った鞭で操りながら引いていく姿を記録している。従って、女性が豚を引く例がないわけではなく、売り買いに際してはこうした姿が見られるのである。

さらに、母親らしき女性が行っている、豚の耳に穴を開けそれに縄を通して右手で引き、左手に持った棒で叩きながら制御するという方法も、東南アジアに見られるものであるという。比嘉武則は、「岡山県立博物館の白井洋輔氏の著書『バタン漂流記』には耳にヒモを通された小耳豚が掲載されている」と、その存在を指摘している⁽²³⁾。筆者が歩いているラオス北部でもさまざまな豚の引き方が見られるが、残念ながらこれまでの調査の中でこの図のような例は見たことはない。しかし、先にも触れたように後ろ足の片方を紐で括り、それを片手で引き、片手に鞭を持って叩きながら制御する方法を見ることは珍しくない。また、後ろ足どうしを紐で括り歩幅を狭くして、それを片手で引き、片手に鞭を持って叩きながら制御する方法もよく見かける方法である。耳の穴に紐を通して引く方法が東南アジア大陸部にあるかどうかは、これからの調査の成果を待つしかない。

しかし、それよりも重要なことは、この豚が黒いということである。奄美では豚は黒いものであり、白い色の豚は人の命をも脅かす魔物であると考えられている。たとえば、沖永良部島では、ヌンキドコロという場所でシルワア（白い豚）が出没し人の股を潜るといふ。潜られた人は死ぬと信じられており、そうしたところを歩くときには、足を交差させながら歩くものであるという。

こうした黒い色の豚を優先し、白い豚を忌避する習俗は中国西南部や東南アジア大陸部にも広く認められる。二〇〇二年に筆者が歩いた中国・広西壮族自治区那坡県百省郷百坎村古岑屯（苗族）では、元は旧曆十二月一日が正月であった（年寄りはそのいうが、若い人たちはそれを認めない）が、今では、十二月二七日に正月用の豚を殺す。黒い豚と白い豚を飼っている。正月に殺すのは黒い豚で、白い豚は販売用として市場に出すものであるという。もともとは全部黒豚であったが、黒豚は一年飼育しないと大きくならないので、六年くらい前から白い豚を飼うようになった。今でも黒い豚を飼っているのは、正月などの儀式に使うためと、ラードが多く取れるからだという。

また、同じ時に訪れた、雲南省広南県八宝鎮百樂辦事処龍達村（白苗族）では、その家で雌豚（母豚）が一年間に産んだ子豚のうち一頭だけ売らずに残しておき、一月二日に殺す。これをブラチオン（殺す子豚）と呼び、必ず黒い子豚でなければならぬといふ、白色の子豚を殺すと不幸が来るといふ。これからの一年間、家の豚が順調に育ち、順調に売れますよという意味で行う。豚小屋から子豚を引き出し、竹の棒で叩きながら、家の周りを左回りに三回廻して、正面の入り口から家の中に入れて、ドンジャン（中央の間）で殺す。刀で喉を刺して殺し、火で

毛を焼いて剃って汚れも落とし解体する。この方法が最も古いやり方で、ブラチオンは湯をかけて毛を取る方法でやってはならない。子豚を殺すときには決して漢民族の言葉を使ってはならない。ブラチオンは、丸ごと煮て細かく切って家人皆で食べ尽くしてしまう。肉切れを家の中から持ち出してはならない。

同じく、雲南省広南県八宝鎮百樂辦事処那讀村（白苗族）でも、その家で雌豚（母豚）が一年間に産んだ全部の子豚が順調に育ったら売ることが、生まれた子豚の中に一頭でも乳の飲みが悪かったり、育ちが悪かったりした場合は、一頭だけ売らずに残しておき、一月二日に殺す。これは黒い豚でなくてはならず、白い豚を殺すと不幸が来ると言って絶対禁じられている。一回これを行ったらその母豚が子豚を産み続ける間は毎年続ける。その日に山から徑三〇センチメートルぐらいの木を伐ってきて、豚小屋の入り口の幅の長さに切りそろえて二つ割りにする。子豚を小屋から引き出し、その片方の叩きながら家の周りを左回りに三回廻して、正面の入り口から家の中に入れて、ドンジャン（中央の間）で叩き殺す。殺したら残りの割木で豚小屋の入り口を塞ぎ「これから先は乳を飲まないような豚は出ないよ」と唱える。刀で喉を刺して殺し、火で毛を焼いて剃って汚れも落とし解体する。この方法が最も古いやり方で、ブラチオンは湯をかける方法でやってはならない。ブラチオンは、煮て頭、内臓、骨付き肉を椀一杯ずつ先祖に供えてる。家の中で皆で食べ尽くしてしまう。肉切れを家の中から持ち出してはならないと伝承している。

また、ラオス・ルアンナムタ県モンシン郡・パイヤロアン村（アカ族）では、結婚式では新婦側、新郎側でも豚を殺して振る舞うが、この時の豚も黒い色が選択される。また、同村のアクウトートー（犬の祭）

は、村の入り口にゲートを設けて、黒い犬を殺して近隣の村に流行ってきた流行病の村への侵入を防ぐ祭りであるが、この時の犬も黒い色でなければならず、白い色は忌避されるのである。⁽²⁹⁾ 鹿児島、奄美諸島、沖縄諸島における黒豚の文化は、そうした白色を忌避する思想と同じ文脈で理解されるべき文化であると言つてよい。

さらに、左の女性の水桶の担ぎ方も面白い。これも名瀬市立奄美博物館所蔵の『雑記下書』や東京

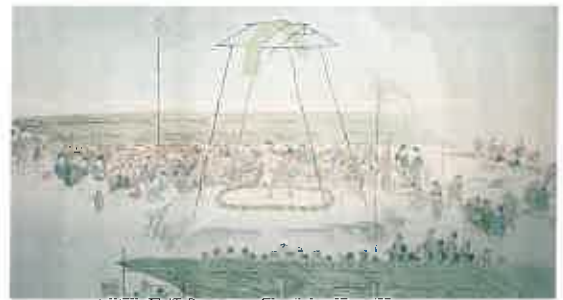


『南島雑話三』 東京大学史料編纂所蔵

館所蔵の『雑記下書』や東京大学史料編纂所蔵『南島雑話三』などの女性が水桶を持つ姿と同じ構図である。また、右端の女性が子どもを背負う姿も明確ではないが、一枚の布で子どもをくるんで背負う方法である可能性があり、これも奄美、沖縄諸島、さらに東南アジア大陸北部に共通して認められる負い方である。

第十景

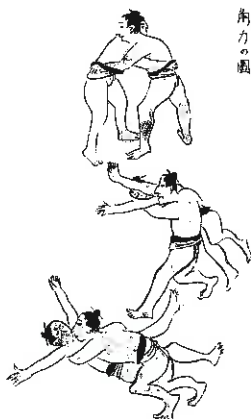
この図は、八月十五夜或いは九月九日の豊年祭などに、聖なる広場であるミヤで行われる相撲の様子を描いたものである。中央には、盛土で土俵が築かれ、藁縄と思われる俵が一周回され、四隅には四本柱が建てられ、屋根が設けられている。その屋根には方形の色布が掛け渡されている。現在、各シマ（集落）に設けられている土俵と、四本柱の屋根の古い姿を示している。また、土俵を挟んで手前側と奥の側に平葺きの棧敷が設けられ、それぞれに幟が一本ずつ立てられている。どちらが主賓



『琉球島真景』第10景部分拡大 S

が沖縄から持ち込まれたものであることは明らかである。

土俵の上では廻しを着けた二人の男が激しい突っ張り合いをしている。二人の陰に隠れているが行司と思われる人の右足が土俵の上に描かれている。二人の男の取つている相撲は、相手を俵の外に出すことを目的としたものであること、円形の俵が設けられていることと合わせて考えると、津波高志が指摘しているように大和相撲であると考えられる。因みに、『徳之島事情』によれば「相撲二種アリテ、一ハ大和相撲ト云ヒ、一



『奄美史談・徳之島事情』 名瀬市史編纂委員会 昭和39年

ヲ島相撲ト云フ。其大和相撲トハ、内地一般ニ行ハルル処ノモノニシテ、島角力トハ、双方腰部ニ帯ヲ纏ヒ、互ニ握拵シテ背部ヲ地ニシテヲ見ザ

レバ勝負ヲ決セズ。故ニ手足身体ヲ地ニ着クトモ勝負ナケレバ、暫時ノ間勢力ヲ争ヒ頗ル疲労ヲ感ズルモ止ムコトナク、何回トシテ尚ホ起上リ元ノ如ク始リ、終ニ真仰ニ倒レテ服部天ニ向ヒタルモノヲ負トスルナリ」とあり、互いに腰に巻いた帯を握り、組合せて取ることが基本とな



『南島雑話自一至二』 東京大学史料編纂所蔵

なっている。このことからこの場面に描かれた相撲が、島相撲ではなく大和相撲であることは明白である。また、鹿児島大学図書館所蔵『南島雑話五』に描かれた「嶋人相撲」の図も、土俵の俵

中で互いに手首を握り合い、廻しに手を掛けていないところから、いわゆる島相撲ではなくて島人の間でも行われていた大和相撲であることが分かる。そうしてみると『琉球寫眞景』のこの相撲の図も『南島雑話』の「嶋人相撲」を元にして描かれた可能性が大きい。

さらに注目すべきは、左手奥に両手で諸蓋もろふたを差し上げている人々の一団である。これは、いわゆる「中入り」といわれる一団で、諸蓋の中にはサンダンカの花などを挿して飾ったおにぎりやワンフニ（豚骨）などの料理などが入っており、それを力士たちが担いで土俵の上を回り、一種の土俵入りをして人々に料理を振る舞うというもので、現在でも豊年祭の相撲の場で見られるものである。この場面もまた、奄美大島の民俗

行事に関する極めて詳細な情報を正確に取り込んでいることが見て取れる。

第十一景

この図は、掲げた帆に全面風を受けて疾走する三隻の帆船を描いたものである。船の前方には、立神、その奥には梵論瀬崎、右手に山羊島が描かれており、ほぼ、第二景と同じであると思われるが、第二景よりも全体が右寄りに描かれているところから、さらに赤崎寄りの場所からの視座で描かれたものと推察される。三隻の帆船は、東京大学史料編纂所蔵『南島雑話自一至二』の須垂の内之海に迷い込んだ駝龍を描いた場面の二隻の帆船や、鹿児島大学図書館所蔵『南島雑話五』の「嶋能大和詰交代迎船圖」との類似が認められるものである。いずれにしても名瀬の港を出港して鹿児島か、奄美諸島の他の港、あるいは沖縄へ向かう船の姿を描いているものであることは間違いない。

四 終わりに

以上見てきたように、『琉球寫眞景』が描いた世界は、比嘉武則を中心とする名護博物館や琉球大学の津波高志が早い段階から指摘したように、「奄美」であることはもはや揺るがしがたい事実であるといつてよい。しかも、「奄美」の中でも「奄美大島」と断定してよからう。さらに言えば、現在の名瀬、大和村、焼内湾入口に至る西海岸と考えていいのではないだろうか。

また、描かれた内容は、比嘉武則がその必要性を説いたように、『南島雑話』と呼ばれる一群の記録との比較をしていくことによって、より

一層の深い理解に達することができることもそのとおりである。さらに言えば、場所の特定については、「伊津部村大和城弁天宮の図」で指摘したように『南島雑話』に『大嶋古図』を加えて比較することによって、より信頼のある情報を得ることができるということも指摘しておきたい。

しかし、そうした『南島雑話』との比較を行うことの前提に、民俗学的な成果が必要になつてくるということである。それは、馬の制御具の「オモゲ」や運搬補助具の「担ぎ棒」、耕耘具の鋤である「トゥゲ」、魚籠である「カタギイテゴ」、さらには女性達の「トノシビ」で指摘したとおりである。つまり、有形資料、無形資料を含めた民俗学の成果を組み入れることによって、『琉球寫真景』が『南島雑話』を越える、極めて精緻な奄美大島の民俗に関する情報を基にして描かれていることを証明することが可能となってくるのである。

さらに重要なことは、そうした『琉球寫真景』や『南島雑話』、『大嶋古図』の比較による奄美の理解は、他の地域との比較によってより深く広い奄美の文化的位置づけを可能にするということであろう。つまり、奄美という自分の地域を深く掘ることと同時に、津波が言うように他の地域との比較は必須である。例えば、「小耳豚」がフィリピンとの関連性を持つ文化であるのに対して、先にあげた様々な生活道具や習俗や砂糖黍の栽培や「砂糖黍絞り機」の構造が東南アジア大陸北部や中国南西部と深い繋がりを示すというように、奄美・沖縄の文化の持つ島嶼性と大陸性の多重構造を解き明かす可能性を持っていると言える。さらに言えば、その先には、柳田国男の「海上の道」の再考の糸口が見えてくると言つてよい。つまり、『琉球寫真景』が『南島雑話』とともに、奄美の文化の持つ多様な有りようを解きほぐすのに極めて重要な民俗図譜

であることは動かしがたいということであり、それはまた、同時に日本列島の文化の多様な形を読み解く場を提供してくれているということである。奄美にとつてまた一つ自分の文化の広がりや厚みを確認する大きな座標を獲得したと言えよう。

本稿を閉じるに当たって、再び一つの感慨が湧く。それは、冒頭に触れたように平成十五年四月二二日から七月二一日にかけて鹿児島歴史資料センター黎明館の歴史部門が開催した企画展「描かれた奄美」で、『琉球寫真景』とともに『大嶋古図』、『南島雑話』に加えて、そこに描かれた有形民俗資料とともに展示したことである。展示した名瀬市立奄美博物館所蔵の『雑記下書』の「婚姻之事」の行列図に描かれた朱色の櫃を認めたときの感動を忘れ得ない。それまで白黒の絵しか見ていなかった筆者は、以前に大島郡宇検村阿室集落で収集した「ガンビツ（棺櫃）」が思い起こされたのである。阿室では女性が結婚するときに、エヒリ（兄弟）が赤く塗った「ガンビツ」を作ってくれるもので、嫁入りの時に櫃として用い、婚家で死亡した時はお棺としてその中に入り埋葬されたのであるという。まさに、ウナリ神信仰を証明する生活道具であり、行列図に描かれた朱色の櫃の謎が氷塊していく瞬間であった。この展覧会は、文字どおり分野の境界を越えた展示であり、それは絵巻、文献、地図を民俗学的な視点から「絵解き」をすることの絶好の機会となった。本稿はその時に得た知見を基にして、平成一五年五月二五日の鹿児島民俗学会の月例研究会において「琉球寫真景に見る奄美の民俗——南島雑話と大嶋古図の間から——」と題して口頭発表を行った内容に手を加えて文字化したものである。

本稿中で用いたラオス北部の知見は、筆者の個人的な調査に加え、総

合地球環境学研究所研究プロジェクト「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の総合的研究一九四五―二〇〇五」（研究代表 秋道智彌教授）に関する現地調査（平成一五から同一七年）で得た資料である。また、中国広西壮族自治区及び雲南省に関する資料は、平成一七年十二月から平成一八年一月に（財）味の素食の文化センターの第十三回食文化研究助成を受けて行った「中国広西壮族自治区における豚食習俗の研究―南九州及び南西諸島との比較の視点から―」の成果の一部である。記して謝意を称したい。

また、本稿を発表するに当たって、『琉球寫真景』に関する写真の掲載を快く許可していただいた、東京大学史料編纂所、鹿児島大学付属図書館、名護市立名護博物館と下原美保鹿児島大学教育学部助教授、名瀬市立奄美博物館には心からお礼を申し上げます。特に、本文に掲載した写真の説明に「S」と記したものは、下原氏の撮影になるものであることをお断りしておきたい。



「婚礼之事」『南島雜記下書』 名瀬市立奄美博物館所蔵



ガンビツ 大島郡宇検村阿室

〔注〕

- (1) 本稿で『南島雑話』と標記する場合は、一群の関係諸本をまとめて呼ぶ表すものとし、個別的な本を表すものではないことを断っておく。
- (2) 比嘉武則「『琉球寫真景』再び」『名護博物館紀要10 あじまあ』・名護市立名護博物館・二〇〇二・三・二九
- (3) 津波高志「琉球寫真景の文化的描写1〜5」『南海日々新聞』・二〇〇二・九・三〇〜一〇・一七
- (4) 比嘉武則前掲書
- (5) 下原美保「『琉球寫真景』考」中山右尚編『平成十二〜十四年度日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究(A)』(2) 研究成果報告書 近世薩摩における大名文化の総合的研究』鹿児島大学教育学部国語研究室 平成十五・三・三十一
- (6) 林蘇喜男「伊津部飯屋について」『平成十四年林蘇喜男雜編』
- (7) ①川野和昭「黎明館企画特別展図録 海上の道―鹿児島島の文化の源流をさぐる―」鹿児島県歴史資料センター黎明館 平成十・二・六
- ②川野和昭「奄美のノロ神装束にみる災患防除の思想」『黎明館調査研究報告』第14集 鹿児島県歴史資料センター黎明館 平成十三・三・三一
- (8) 弓削政巳「芭蕉と域内交易」『喜界町記』 喜界町 平成十・二・八・
- (9) この場面が名音だということは、弓削政巳氏とも確認をしている。
- (10) 所崎平「藩政期の陶業技術発達の概観」『名瀬市誌上巻』名瀬市役所・名瀬市誌編纂委員会 昭和四三・三 所崎は文化五年説を採らずに文化八年説を採っている。

(11) 所崎平前掲書 所崎は両記事を「伝説的移入(慶長年間)」として扱い、史実扱いはしていないが、沖繩に二転子搾り機が最初に移入され三搾り機が沖繩で考案されたというのは、有形民俗資料の比較から考えると興味深い問題である。

(12) 川野和昭「トゥゲ」 鹿児島県民具学会編『鹿児島県民具博物誌 かがしまの民具』 慶友社 一九九一・十・二

(13) 川野和昭「オモゲー」 鹿児島県民具学会編『鹿児島県民具博物誌 かがしまの民具』 慶友社 一九九一・十・二

(14) 小野重朗「ニンブ・ウンジョウ」 鹿児島県民具学会編『鹿児島県民具博物誌 かがしまの民具』 慶友社 一九九一・十・二

(15) 川野和昭前掲書(7)②

(16) 川野和昭「海上の道」再考のための序説―楔締め太鼓の系譜をめぐって― 『黎明館企画特別展図録 太鼓は語る―鹿児島とアジアの響き合い―』 鹿児島県歴史資料センター黎明館 平成十四・二・八

(17) 恵原義盛『奄美生活誌』 木耳社 昭和四八・七・三十

(18) 川野和昭「吹き溜まる南の民具 運搬具①背負い籠」 『季刊東北学第一号』 東北芸術工科大学東北文化研究センター 二〇〇四・十・二

(19) 川野和昭「カタギイテゴ」の作り方と分布と文化の地域性『黎明館調査研究報告』第12集 鹿児島県歴史資料センター黎明館 平成11・3・31

(20) 弓削政巳「琉球寫眞景の世界」 『南海日日新聞』・二〇〇〇・十二・十二～十二・二八

(21) 津波高志前掲書・比嘉武則前掲書

(22) 栄喜久元「与論島の動物と人間の交わり(一)」 『鹿児島民俗』 一四号 鹿児島民俗学会 平成一〇・一〇・三二

(23) 比嘉武則前掲書

(24) 出村卓三「ムン話」 『南海日々新聞』・二〇〇一・三・二二

(25) 川野和昭「中国広西壮族自治区における豚食習俗の研究―南九州及び南西諸島との比較の視点から―」 『第13回 食文化研究助成成果報告書』 (財)味の素食の文化センター 平成十三・三

(26) 川野和昭「奄美・沖繩とラオス・タイ北部の少数民族の動物供犠―比較民俗学と民俗の地域性―」 『黎明館調査研究報告』第13集 鹿児島県歴史資料センター黎明館 平成十二・三・三一

(27) 津波高志前掲書

追記

本稿を脱稿した後、二〇〇六年二月二八日に訪れた中国・雲南省昆明市にある雲南民族博物館で、雲南省文山県と西双版纳のタイ族が使用していた、木製で凸凹歯車三転子の砂糖搾り機を二台見ることができた。

また、二〇〇六年三月十一日に訪れた大島郡住用村山間の原野農芸博物館(原野耕三館長)では、タイ・チェンライ県のコムアン族が使用していた木製で凸凹歯車三転子の砂糖搾り機一台を見ることができた。それは、いずれも奄美・沖繩で使用されている三転子のもと同じの構造を持つものである。これらの新たな情報は、中国南西部ないしは東北タイにおいて、螺旋歯車二転子と凸凹歯車三転子が併存していることを物語るものである。先に触れた螺旋歯車二転子から凸凹歯車三転子が沖繩で発明されたとする説と同時に、中国南西部から東南アジア大陸北部における二つの型の関係を併せ考えなければならない。今後の課題である。

「琉球寫真景」全11景 岡本豊彦作

縦：42cm、横：約14m（1景の横：約120cm） 名護博物館所蔵（名護市指定文化財）
（名瀬市立奄美博物館『特別展「琉球寫真景」と奄美』より）



「琉球寫真景」①



「琉球寫真景」②



「琉球寫真景」③



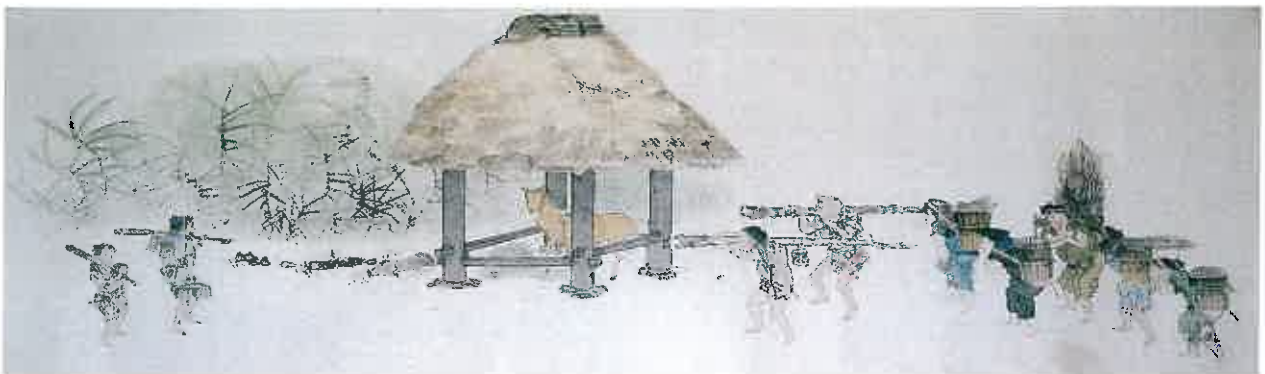
「琉球寫真景」④



「琉球眞景」⑤



「琉球眞景」⑥



「琉球眞景」⑦



「琉球眞景」⑧



「琉球島真景」⑨



「琉球島真景」⑩



「琉球島真景」⑪

(本館学芸課長)